

青春スクロール

母校群像記

<http://t.asahi.com/dnnn>

勘の良さ 野球で磨く／県4強の誇り

青春をスポーツに打ち込んだ多摩高校の卒業生も、さまざまな世界で活躍している。

東大からロッテに入団して話題となった野球部投手の小林至(46、1986年卒)は、江戸川大教授の肩書のまま福岡ソフトバンクホークスに出向し、執



「トラック1杯分の入社案内」には目もくれず、プロ入りした小林



多摩高校 ②

行役員の重責を担う。「多摩高野球部はとにかく練習が厳しかった」。早朝からグラウンド整備、授業中もボールを縫ったり磨いたり。あたりが真つ暗になるまで練習した。「(強豪校の)武相か法政二高ならともかく多摩高でこれはないだろう、とぼやいていた」と笑う。

野球部エースで、3年夏の神奈川県大会で多摩高初の4強入りを果たした大森正久(55、77年卒)。現在は全国農業協同組合中央会の審査役、インターン・Uターン希望者と受け入れ自治体



大森は夏の神奈川県大会で4強入りした時のエース

を結ぶNPO法人の事務局長として奔走する。「4強になれたことで、どんな難しい仕事も『やってやれないことはない』との気持ちで臨めるようになった」。この大会の優勝校は、原辰徳選手(現・巨人監督)がいた東海大相模だった。

三井物産金属業務部長の得田儀生(56、76年卒)は、少年野球時代から大森の1年先輩。東大1年の時、東京六大学野球の秋のリーグ戦で江川卓投手率いる法政大を相手に8回から登板し、延長14回まで投げ合った。「人生や仕事に大切な勘の良さは野球で鍛えられた」と話す。「多摩高には博士号を持つ生物の先生とか、生徒のレベルに関係なく難解な授業をする物理の先生とか、自分も楽しんで授業をする先生が多かった」

日清食品グループ陸上部の矢沢曜(24、2008年卒)は2、3年で高校総体に出場し、早大1年の箱根駅伝1区では区間賞に。「中学で市町村レベルだった自分が区間賞を取れたの



早大1年の時、箱根駅伝で区間賞に輝いた矢沢

は、多摩高陸上部顧問の深谷昌昭先生に『常に挑戦する心』を教えていただいたから」と振り返る。18日、東日本実業団陸上競技選手権に出場する。

川崎市医師会会長の高橋章(68、1964年卒)はバスケットボールに明け暮れた。部の主将を務めるなど、持ち前のリーダー気質は当時から。「医学部志望だった成績はいま一步。でも先生は、ダメとか受けるなどか言わなかった」。小児外科医と

して活躍し、82年に独立開業した高橋は「希望の仕事に就いて今も働いていられるのは、多摩高にいたおかげ」と語る。

多摩高は合唱コンクール、球技大会、川崎大師(川崎区)まで歩く大師強歩など行事が多い。メインは文化祭と体育祭からなる9月の多摩高祭。体育祭では3学年を縦割りに、誕生月で春、夏、秋、冬の4組に分けて競う。組ごとに「マスコット」と呼ぶ高さ数メートルの巨大な張り子を作るのも特徴。各組のリーダーは卒業後も「〇組団長」と呼ばれることが多い。多摩高に関する情報はkanagawa@asahi.comの「青春スクロール係」へ。